

秦泉寺廃寺

第1次・第2次調査

監修

広田典夫・岡本健児

高知市教育委員会

序 文

全国的にもユニークな、地域住民を中心とした調査団により、由緒ある秦泉寺廃寺跡が調査され多大の成果を得ましたことはまことに喜びにたえません。調査の結果「秦泉寺様式」とも呼び得るような新しい伽藍様式が発見され、高知の秦泉寺から日本の秦泉寺へと学術的にも貴重な資料が得られましたが、なおその全貌を確認するには統一しての調査・研究が必要だろうと思います。高知市教育委員会としましても今後とも努力致してまいりたいと考えております。

調査にあたり、格別のご協力をいただきました、土地所有者の永野拓氏・岡村久吉氏・耕作者の島崎賢二氏・由原敏幸氏をはじめ、地元の皆さん・並びに岡本健児・広田典夫両先生に深く感謝申しあげるとともに、この報告書が、学術上・市民生活上活用されることを期待致します。

高知市教育長 岩崎孝吉

「秦泉寺」の地名でひろく市民に親しまれてきたこの地区には、古くから同名の寺院があったと伝えられており、時折り「布目瓦」などが出土している。

しかし、今まで本格的な調査は行なわれていなかった。このため地元では学術的な発掘調査を望む声は次第に高まり、地域の文化財は地域住民の手で……と、「秦地区公民館」を中心とし、県・市教育委員会並びに岡本健児・広田典夫両先生の協力を得て調査団を結成し調査に当ってきた。

この報告書は昨年に引きつづき本年度第二次調査を行なったものの概要である。学術上・教育上の資料として活用すると同時に、市民の豊かな人間性を育てるうえに役立てば幸である。

秦泉寺廃寺跡発掘調査団

団長 永野益樹



第1図 秦泉寺廃寺跡

1. 秦泉寺廃寺の名称と位置

秦泉寺廃寺の秦泉寺は寺の名でなくこの地区の地名である。この廃寺の一部に従来カネツキ堂と呼ばれていた地点が残っている。この地点を昭和15年に当時県立図書館に勤務していた長岡康・高知師範学校の山本淳両氏によって、調査している。このおり蓮花文鏡瓦・巴文鏡瓦・重弧文字瓦などが発見されている。この記録によって本廃寺が中世から奈良時代までさかのぼる廃寺跡であることが、推定されていた。このように推定される廃寺が現在の秦泉寺があるので、この地名をとって秦泉寺廃寺跡と呼ばれるようになった。

秦泉寺廃寺の位置は、高知市のほぼ中央部から土佐山に通づる、県道高知本山線が市街地から北に向って通じている。この県道で市内愛宕町をとおり北に進むと、高知市の北の

山麓を流れる久万川に至る。久万川を越えると愛宕神社のある愛宕山の麓にでる、西側に秦小学校をみて約500mいくと、秦農協前の分岐点にでる。この四辻を約100m直進すると県道の西側にや、ひらけた水田地帯がみられる。この水田地帯の一部に秦泉寺廃寺跡がある。この水田地帯は久万川の支流金谷川と、西側の迎水寺山にはさまれた扇状台地上に造られた水田である。この扇状台地の先端部に秦泉寺廃寺跡がある。正確には高知市中秦泉寺鍛治屋内鷹通り、原野141-1（高知市の所有地）を中心とする地域で、水田および人家も含む場所が、秦泉寺廃寺の寺域と推定されるところである。（第1図・第2図）



第2図 秦泉寺廃寺跡を含む遺跡の環境

2. 遺跡の環境 (第1図)

秦泉寺廃寺を中心とする秦泉寺地区の文化的環境についてふれてみたい。まず秦泉寺廃寺附近を中心に、北秦泉寺・東秦泉寺・中秦泉寺・西秦泉寺・南秦泉寺があり、西秦泉寺の西に宇津野地区がある。これらの地区を総称して秦地区と呼んでいる。この秦地区につくられた秦泉寺廃寺の前段階である、古墳時代の古墳について見てみると、12基を数えることができる。しかしこれらの古墳のなかには破壊され現存しないものもある。

秦泉寺東谷古墳 (第1図7)

秦泉寺愛宕山古墳群 (第1図4・5・6・今1基あった)

秦泉寺吉弘古墳 (第1図8)

秦泉寺淋谷古墳 (第1図9)

秦泉寺開古墳 (第1図11)

秦泉寺迎水寺古墳 (第1図3)

秦泉寺日の岡古墳 (第1図10)

秦泉寺宇津野古墳 (第1図1・2)

以上あげた古墳のほかに、秦泉寺廃寺の終わりの頃とみられる、瓦窯跡が発見されたが、この発見も瓦窯跡の灰捨場とみられる場所から出土した密着した平瓦で、高知市の市街地に近いこの地区では、宅地造成が進んでおり現在ではすべて破壊されている。

以上のように秦泉寺の小さな地域内に12基の古墳がみられるが、先進地域と比べれば問題にならない数ではあるが、土佐では一地区としては割合多い方である。これら12基の古墳は後期古墳で内部は横穴式石室古墳である。そしてその時期は6世紀末から7世紀前半にかけて造られたものである。このことは6世紀頃になるとこの地域で次第に開発も進められ、生産性も向上して6世紀終末頃に小規模ではあるが、古墳を造営することのできる豪族が出見しはじめたことを、うかがい知ることができる。あわせて7世紀の時期をどうし秦泉寺廃寺を造営することのできる富と、権力を持つ基盤が、このころから次第にはぐくまれていたことをも推察することができよう。次にこれらの古墳を造営しうる人々の集落について考えてみたい。今まで秦泉寺地区では古墳時代の集落跡は発見されていない。しかし文献による「和名抄」にでてくる郷について考えてみたい。もちろん古墳時代の集落をあつかうのに「和名抄」にある集落、すなわち平安時代の郷をあてはめることは、時代的に差異があるのはもちろんある。しかし「和名抄」の郷のうちあるものは、7世紀の前半頃にはその集落の前身としての、姿をあらわしつつあったと考えることもできそうである。そこで秦泉寺地区が中心になる土佐郡、すなわち土佐郷について高知女子大の岡

本健児教授は次のように、高知県史に記述されている。

「土佐郷については古米二説が存在する。一説は安養寺禾磨の説であって『土佐幽考』に掲げる所の現在の高知市一宮説である。そして今一説は、吉田東伍博士の著である『大日本地名辞書』による布師田説である。

この両説は土佐郡の神戸郷をどこにするかによって異なってくるのであろう。

本書では神戸郷を安養寺禾磨の考え方と同様に高知市神田をあてている。ただ本書は神田だけでなく鴨田もこのなかに入れなければなるまい。その理由づけとして、安養寺禾磨も『上佐幽考』のなかでふれているが、次の『続日本紀』にある記事も一つのものである。

考謙天皇神護景雲二年十一月戊子土佐郡人神依田公名代等四十人賜姓賀茂

神依田は即ち神田であり、また賀茂氏の田であるので鴨田なのであろう。よって神戸郷は今の高知市神田と鴨田と考えてよいだろう。

さて神戸郷が今述べた地域であるので、それに対して土佐郷は今の高知市布師田、それに一宮、そして秦泉寺（旧村名を秦と言っている）がそれであろう。」

この上佐郷は土佐の中心地である。上述したかかる環境の地に本寺院が営まれ、今日庵寺としてその遺構を残している。

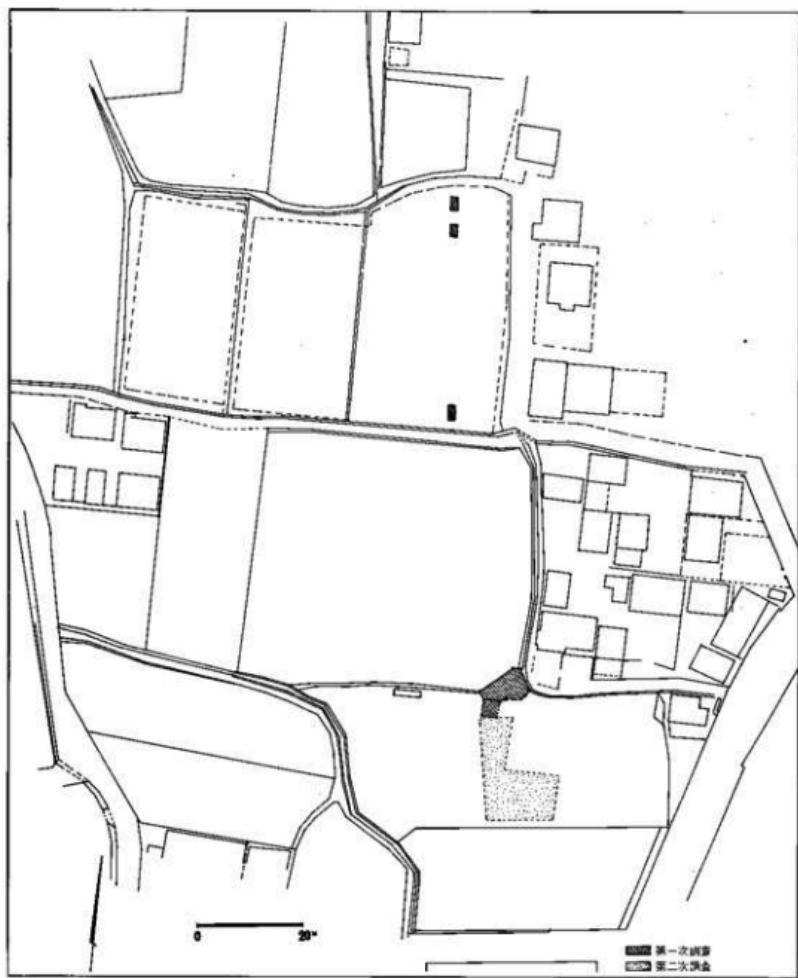
3. 調査の契機と第一次・第二次調査

秦泉寺廃寺の調査は、緊急調査である。秦泉寺廃寺のある中秦泉寺地区は、高知市の市街地に近く、近年特に宅地造成が進み、高知市のベッドタウンの状況である。そこでできるだけ早く秦泉寺廃寺跡の寺域を確認し、その保存のための試作を行なう必要がある。そこで高知市教育委員会は県の援助もえて、第一次発掘調査を行なうことになった。

第一次調査は昭和50年10月28日から11月1日までの4日間（中1日雨天のため中止）行なった。この秦泉寺廃寺の調査は、秦地区公民館が中心になり、土地所有者・土地耕作者・高知県教育委員会・高知市教育委員会・学識経験者により、秦泉寺廃寺発掘調査団を結成し、発掘のための会則も定めた。そして会長には永野益樹公民館長となり、岡本健児・廣田典夫が学識経験者として発掘指導と報告書を書くことになった。

第二次調査は昭和52年1月25日から28日までの4日間行われた。第二次調査は第一次調査を行った南面の水田で、この水田内にある遺構の確認を目的とした。

4. 発掘の状況 (第3図)



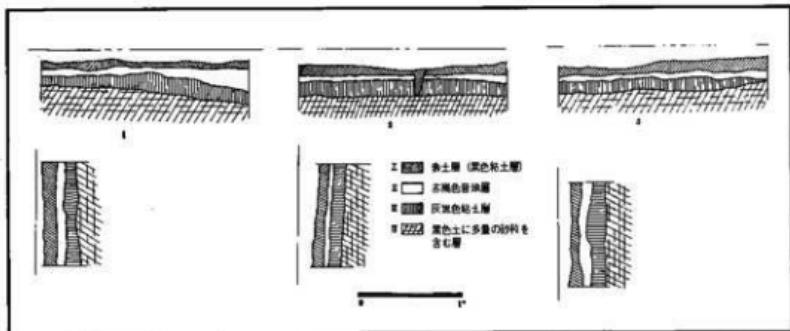
第3図 遺構周辺と、第一次・第二次調査

第一次調査は高知市の所有になる原野141-1を中心に $8\text{ m} \times 5\text{ m}$ の区域内と、その原野に接する前面（南側）の水田 $10\text{ m} \times 5\text{ m}$ それに原野の西の方に $5\text{ m} \times 1\text{ m}$ の発掘区を定め

た。次に原野の北約40mに幅3mの道路に接して、水田があり現在はビニールハウスが作られている。このビニールハウス内に幅1m長さ2mのトレンチを3本いた。

まずビニールハウス内のトレンチを南から、1号・2号・3号トレンチとした。各トレンチ共第一層は黒色粘土の表土層で、第二層は赤褐色地（火山灰）層である。第三層は灰黒色に粘土を含む層であり、第四層は砂礫を多量に含む黒色土となっている。第三層内に小量の瓦の破片と土師器片が見出される。

トレンチ内では第三層に遺物の発見がある。その第三層は1号トレンチより、2号トレンチ、3号トレンチと北に進むにつれてその層の厚みは少なくなる。そして3号トレンチでは第三層には瓦片も含まれない。（第4図）



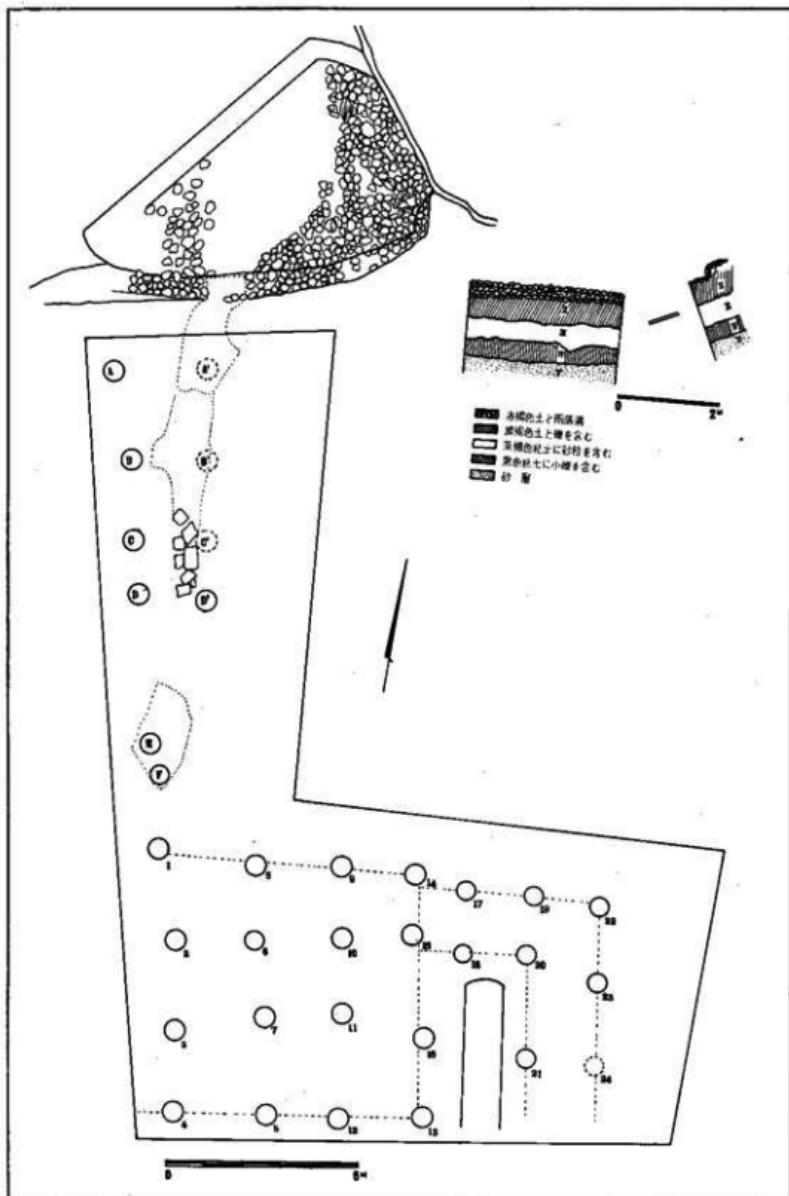
第4図 ビニールハウス内断面

原野141-1の市所有地は、表土下50cmより一面に栗石と割石が敷きつめられている。敷石の厚さは30cmある。そしてその南面に雨落溝とみられる幅30cmの一段（15cm）さがった造構が見出された。この雨落溝とみられる造構のほぼ調査区の中央部が、一段さがっている。その前面の水田では幅30cm深さ約25cmで長さ2mにわたって瓦が敷かれていた。

雨落溝の南面で、瓦の敷かれている東側では、瓦の見出はなかった。しかし雨落溝より深さ79cmの砂層までには、四層にわたって版築が行われていた。（第5図）

第一層は表面に栗石と割石が敷きつめられており、その内部は黄褐色土に礫が混入された層である。第二層は黒褐色土に礫が混入され、第三層は茶褐色粘土に砂礫が混入した層で、第四層は黒い粘土と小礫を混入した層であり、第五層は砂層になっている。

講堂跡と推定される栗石と割石が敷きつめられた版築上部から、栗石の間にはさまれる



第5図 第一次・第二次調査の見出遺構

かたちで、瓦の破片が小量発見された。なお第一次調査の前からこの場所には、直径約40cmのエノ木があった、このエノ木の下には、第一層上部にみられた栗石はみられなかった。このことについては地元の人は次のように話していた。昭和15年長岡康・山本淳両氏が調査した時、エノ木の苗を調査場所に植えたと。即ちこの場所が栗石がみあたらなかった場所で、おそらくこの調査時に栗石をはぎとっていたためであろう。第一次調査で多量の瓦が出土した地点は、版築前面の南側で、石階と単廊と推定される版築上で、それも版築の東側に集中していた。そしてこれらの瓦は焼成の悪いもので、完形のものもあるが、単廊の東側の側壁を築くかたちで、積みあげられていた。なお前面にも多量の瓦が埋没していることを確認して、第一次調査を終わった。

第二次調査は昭和52年1月25日から28日までの4日間行なわれた。第二次調査は第一次調査で確認されていた、水田を約250m²調査した。この水田は第一次調査で発掘した原野141-1の前面で、番地は田80番地である。

まず第一次調査で確認された、石階と単廊と推定された場所で、その前面を幅7m×15mの区画を設定し調査を進めた。表土層である耕作土をのぞくと、その下に水田の水もれをふせぐための床をかためた、茶褐色の粘土層が見出され、その下に版築上部の黒褐色土に礫が混入された層がある。そして第一次調査で見出されていた版築東側の瓦積上部の南側に、同じように瓦が発見された。(第5図)、版築の上部に割石と小瓦片を含む柱の楚石を置く根石が発見され、そのほぼ南側2.4mに根石の割石と小瓦片を見出、その南2.1mに割石と須恵器片を置く根石を、1.5m南にも同様な根石が見出された。第5図Dの根石の東側1.8mにD'の根石を確認された。なおAとA'の間隔2.4m、BB'の間隔2.1m・CC'の間隔1.8mで瓦の積石の間に割石を敷きかためた根石が見出された。なおD'の中央南3.9mと4.8mに、多量の瓦片の中に割石でかためた根石を見出した。中央部Fの南1.8mに1の根石を見した。1の根石を中心に南に2.1m間隔に2・3・4と東に5・9・14の根石を見出した。(第5図) すなわち1を中心に1~4・1~14の根石を各一辺とする計16基の根石群を見出した。これらの根石群はそれぞれに割石か栗石と須恵器片か瓦片が組合わされていた。なお、第5図の11と15の東側に1.8m間隔に17・18・19・20・22・23が見出され、22の南2.1mに23をその南2.1mに24の根石がみられた。20と21の間隔は2.7mあるがその東側1.8mに24の根石がある。なお21と16の間に幅1mの溝状遺構が南に通じている。

田80番地の南、田54-1との境界に、セメントの壁で水田を仕切っていたため、第二次調査では南端までの根石群までは調査できなかった。

秦泉寺廃寺跡第一次調査



1

1. 秦泉寺廃寺を遺跡西側の迎水寺山の斜面から見たもので、扇状台地の先端部に造られた寺院跡で、高知市の市街に近く最近特に宅地化が進んでいる。中央部にみられる水田地が秦泉寺廃寺跡で、1・2は第一次調査と第二次調査の地点を示したものである。

2



2. 講堂と推定される遺構の一部で、中央部に見られる敷石が版築の上部である。この版築上部敷石が見られない部分が、昭和15年に発掘された場所で、エノ木が植っていた所である。箱尺上部にかかる大きな石は、

講堂の礎石であるがその位置は石が動かされていたために明確ではない。なお講堂前面で南側に面した水田中に、瓦を積み上げて壁をつくっている状態が見出されている。

3. 講堂の一部で、高知市所有地の原野141-1番地内で、版築上部の栗石および割石でつくられた床面で、中央部東側の○印の地点が礎石の根石部で、西側の栗石の抜かれている部分が、昭和15年に調査された場所である。



3

4. 講堂の版築上部と推定される敷石の前面南側の、敷石から30cm下った場所で、幅60cmの溝状遺構である。ここには一面に栗石と割石が敷かれている。これは基壇の用辺につくられた雨落溝の一部であると考えられる。

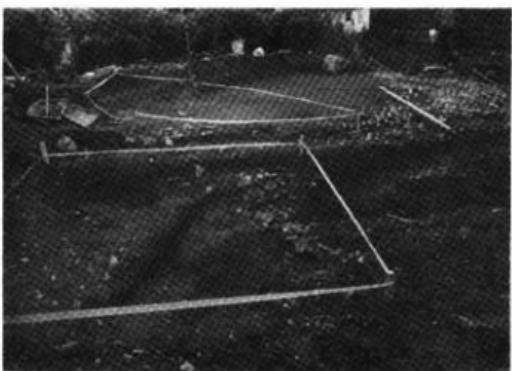


4



5

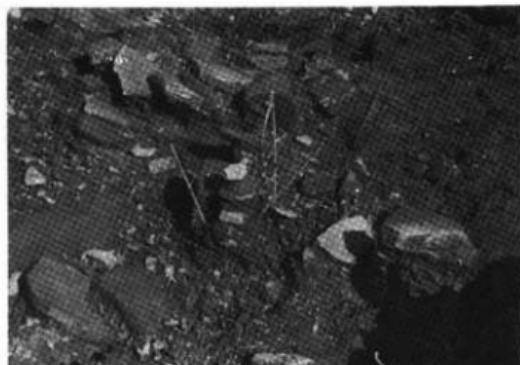
5. 講堂跡と推定される基壇の構成で、基壇面から 130 cm 下から 4 層にわけて版築がおこなわれている。版築最下層の第 4 層は厚さ 30cm、第 3 層 25cm、第 2 層 30cm である。なお第 1 層は雨落溝と基壇とにわかれている。



6

6. 講堂跡と推定される基壇部と金堂に通ずる単廊部の遺構で、基壇部の一段下った部分が雨落溝である。前面南側の瓦を重ねた部分が、単廊の東側で壁面の版築状態である。

7. 第一次調査の南端部で、瓦を重ねて版築された状態を示し、中央部に須恵器の高杯がみられる。ここで出土する瓦および須恵器は、焼成のあまり良くないもので、焼成の良いものにはゆがみがみられる。このことは版築に使用された瓦は瓦窯における焼成不良品をもって作られたことを考えさせられると共に、後述するが須恵器の高杯がみられたことは地鎮的な意味もうかがわされる。



7



8

8. 発掘区の基壇部の両側で、版築上部の栗石の間から見出された重弧文字瓦の破片である。



9

9. 基壇南側の雨落溝で、单廊東側の瓦による版築の接する場所である。この場所では雨落溝の一部を切りこんで、東側と西側から流れこんだ水を、瓦を積上げた東側に流したとみられる遺構が見出された。

第二次調査



10

10. 第二次調査のおこなわれた中秦泉寺の水田80番地の全景である。遺跡西側の迎水寺山の中腹から見たものである。中央部が今次の調査区で、その手前にみられる水田中央部の土手の一部が、秦泉寺廃寺の土塁の一部と考えられる。



11

11. 秦泉寺廃寺跡の第二次調査終了時の全景である。まず人物の集まっている場所が、第一次調査時に見出された、講堂跡と推定される場所で、その南側に単廊つづいて金堂跡と推定される東半分、それに接続する廻廊が見出された。○印の

場所が礎石が置かれていた根石の位置を示すものである。北側の水田中央部に1個の礎石が残っている。この礎石は割合大きなもので、その位置は創建当時のまゝ残っていると考えられる。



12

12. 遺構を北からみたもので、手前が単廊の位置を示し、前方に見られる場所が金堂と推定される場所である。○印が礎石が置かれた根石の位置を示す。なおこれらの遺構において礎石が見出しないことは、水田耕作面と基壇の上部とに差が少ないので、水田造成時に取りのぞかれた事は、容易にうかがうことができよう。

13. 単廊中央部附近で、単廊東側壁の版築に使用された平瓦の出土状態である。
使用されている平瓦は焼成のあまり良くないものである。

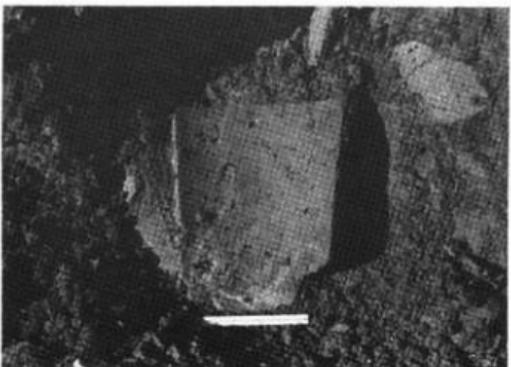


13



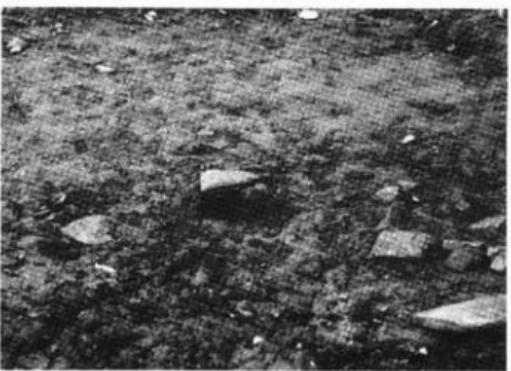
14

14. 単廊南よりの場所で、版築に使用された平瓦と、割石と瓦によってつくられた礎石の根石部が見出されている。

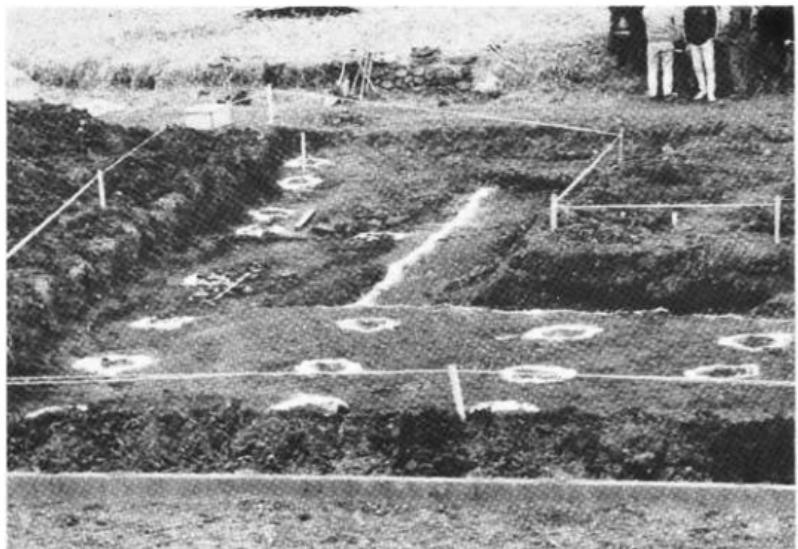


15

15~16. 共に単廊部より出土した瓦で、版築に使用されたものである。15は平瓦で完形をなすが焼成はわるく、もろい。16は重弧文字瓦の破片である。そしてその附近にも版築用の平瓦の小破片が見出されている。



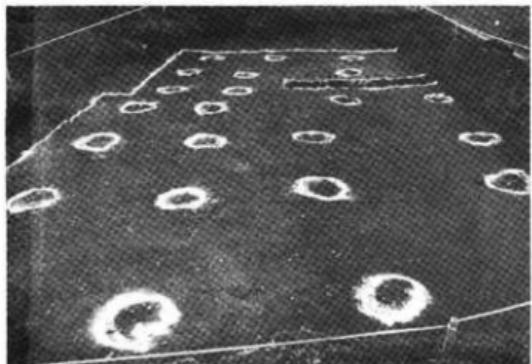
16



17

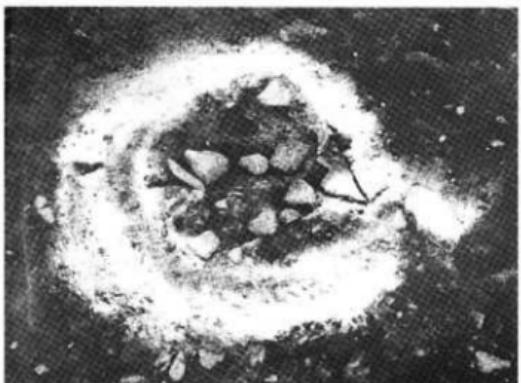
17. 単廊部を南からみたもので、版築に使用された瓦がみられる。瓦が見出された東側で白線附近より東側では、あまり版築がおこなわれていない。この単廊から北側の講堂と推定される場所とは段差がみられ、単廊から講堂までは、ゆるやかに上り、基壇とつながる場所は石階でつながっていたことが、見出された版築の状態から推察することができる。

18. 金堂と廻廊の一部と推定される遺構を、西から東の方向にみたところで、金堂部を含む東半分の遺構である。○印の遺構が礎石を置いた根石の位置で、金堂部では16基の根石部を見出した、そしてその間隔は2.1m約7尺の柱間と推定できる。その東側に金堂跡とつ



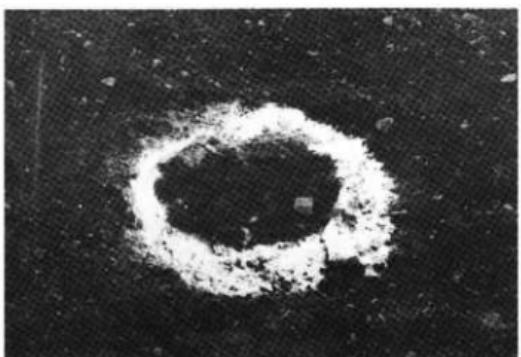
18

ながる廻廊部が推定された。この廻廊部では東西の柱間2.1m、南北の柱間は1.8mが計測された。なお廻廊部も東側に廻ると柱間の間隔は2.1mと南北が長く、東西が1.8mとせまくなっている。金堂と廻廊との間には雨落溝とみられる遺構が見出され、南にのびている。



19

19. 金堂部の單廊に一番近い根石部の遺構である。金堂部と推定される部分の中央1番北側の根石で、栗石と割石、それに瓦と須恵器の杯が発見された。栗石、割石、瓦は根がためのために敷かれたものであろうが、須恵器の杯は、基壇の地鎮的要素をもつものではないかとみられる。



20

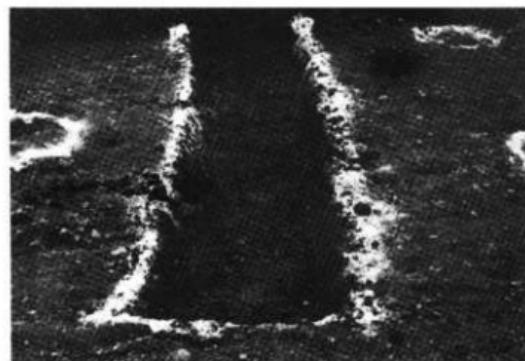
20. 金堂部の3と呼ぶ根石の基礎部の遺構である。小量と栗石と1個の瓦片が見出された。金堂部と廻廊部と推定される根石の遺構には必ず、瓦もしくは須恵器片が1個又は数個見出されている。

21. 金堂跡の東側廻廊部を北から南に向ってみたところである。柱間の間隔は2.1mと1.8mある。廻廊部の南は水田54—1番地の方向にのびていることは考えられる。廻廊部と金堂跡との間には溝状遺構が見出された。



21

22. 金堂と廻廊の間にある溝状遺構で、雨落溝と推定される。幅1.1m、深さ30cmで南の方向にのびている。



22

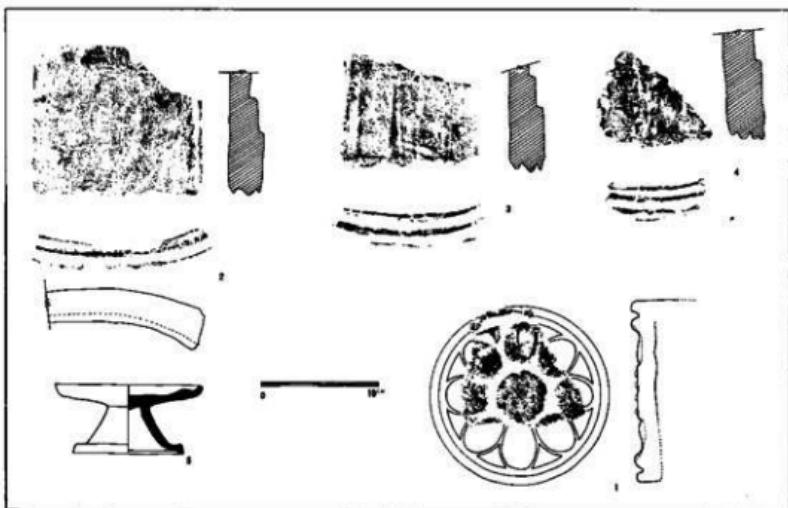
23. 講堂跡と推定される北側の141—2番地にある畠で、その中央部近くに残る礎石である。礎石の上には祠を作りまつられている。この礎石は約80cm×60cm大の平らな石で、創建当時の姿を残しているただ一つの礎石である。



23

秦泉寺廃寺出土の遺物

秦泉寺廃寺跡の発掘調査によってえた遺物は、瓦・須恵器・土師器などで、なかでも瓦の出土数は多量である。これらの遺物によって秦泉寺廃寺の創立年代をも考えることができる。又これらの遺物が年代決定に有力な示唆を与えてくれる。まず瓦類・須恵器・土師器の順に記述していく。



第6図 鐘瓦、字瓦、須恵器、実測図

△. 瓦 類

イ. 単弁蓮花文鐘瓦 (第6図1)

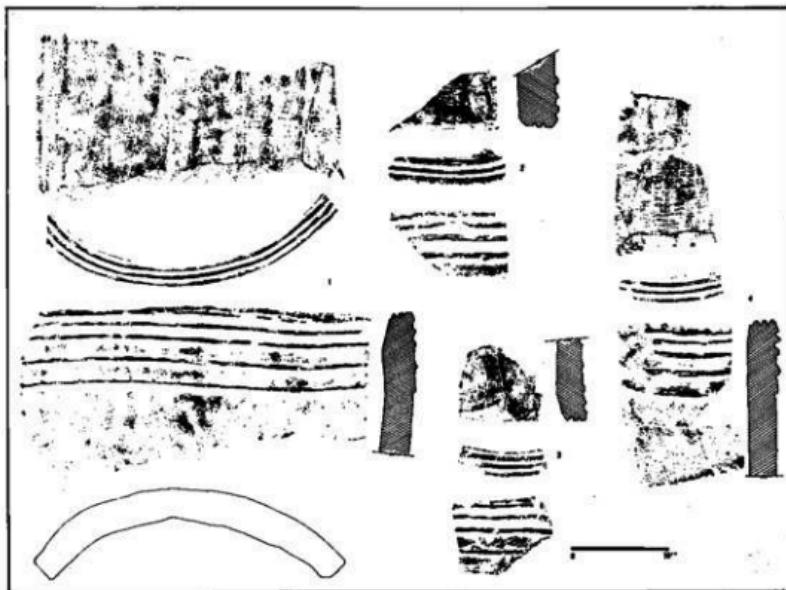
秦泉寺廃寺跡の調査で発見された唯一の鐘瓦である。鐘瓦の一部でそのうえ風化がひどく、その全様を知ることができなかったのは残念である。復原直径15.4cm中房の直径4.6cmである。中房の蓮子は磨滅していてその数を知ることはできなかった蓮弁は8葉で中央部がやくぼみ、先端は丸くなっている。周縁部はごく一部しか残っていないが、素縁であろう。

ロ. 字 瓦

完全な形のものは1個もない。ほぼ完形をうかがうことのできるものもあるが、大部分破片になっている。これらの字瓦は大別すると3種類に分類することができる。

A. 重弧文字瓦その1 (第7図4)

三重の重弧文で肉が厚く頸はよく発達している。ほりはあまり深くなくはばもや、せま



第7図 宇瓦実測図

い。内面の布目は割合整ぜんと通っている。裏面にある凸帯は四段で、はりつけ凸帯である。や、内によったところに一段の稜がみられる。厚さ3cmである。

B. 重弧文字瓦その2（第7図1・2・3）

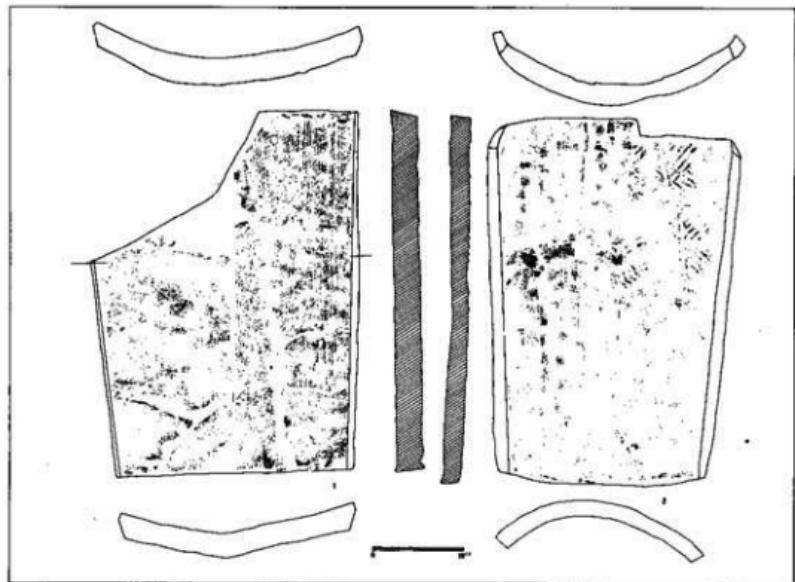
三重の重弧文で肉が厚く、ほりも深い。内面の布目は割合整ぜんと通っている。裏面の凸帯は四段で、重弧文字瓦その1とにかくっているが、凸帯ははりつけではなく、前面部を窓けずりによる凹をついている。厚さは3cmと4cmのものがある。

C. 重弧文字瓦その3（第6図2・3・4）

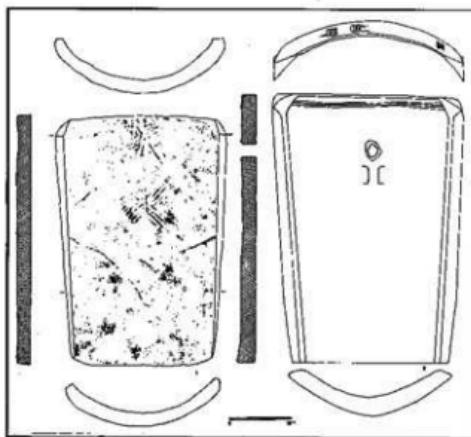
三重の重弧文であるが、一見すれば二重の重弧文のように見える。肉厚くほりも深い一方の頸は良く発達しているが、瓦上部にある頸は薄い。裏面に二段の段がみられ、瓦全体の厚みは薄い。

ハ. 平瓦（第8図1・2、第9図1・2、第10図1・2、第11図2）

平瓦（女瓦）は出土数が多く、完形品も多数みられるが、焼成はあまり良くなく、なかにはゆがみのみられるものもある。布目文は布目にたしうるの大小はあるが、概して細目のものが多い。直交する布目文が多いが、中には多少波形をなすものもみられる。凸面の文様は繩目の叩目文・格子目文・綾杉文などがみられる（第12図1・2・3・4の文様集



第8図 隅切瓦実測図



第9図 平瓦実測と拓

成)。平瓦の大きさはほぼ同じ様な大きさで、幅32cm・長さ43cm程度で、そのそりは中央部で6.3cm前後である。厚さは多少の差はみられるが3cm程度のものが多い。隅切瓦(第8図1・2)が2個出土している。その1は降棟に接する瓦、一方を斜めに切断して作られたもので、今1個は平瓦先端部を、半分よりやや小さく幅2cm程切取って作られた、隅切瓦もある。ほかに第

9図2のように角釘の穴を穿った平瓦も見出された。

ニ。丸瓦（男瓦）（第11図）

丸瓦の出土数は少なく、完形品もなかった。ほぼ形のわかる丸瓦は、第11図1で、中央近くで厚さ2cm程度である。発見された男瓦はすべて行基葺瓦であった。

ホ。須恵器

（第6図5・第12図1・2・3）

須恵器は高杯・杯・鉢・甕などの中出土がある。器形別にその概要を述べる。

杯（第12図1）

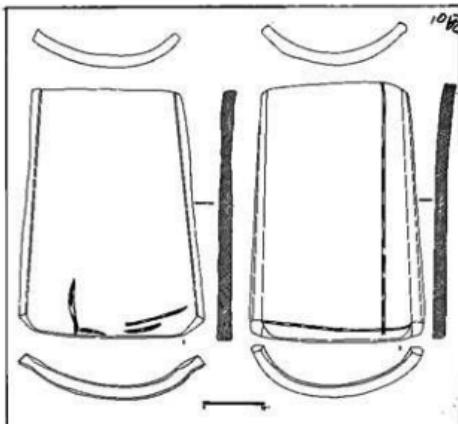
金堂跡と推定される根石1（第5図）から出土したもので、蓋受けの立ち上りは1cm、灰黑色硬質で、焼成も良好である。土佐の須恵器IV式に編年されるもので、地鎮的意味を持つとみられる。今一つの杯（第12図3）は、口唇部でやや内傾する高台のあるもので、ほぼ奈良時代中葉に編年されるものである。

高杯（第6図5）

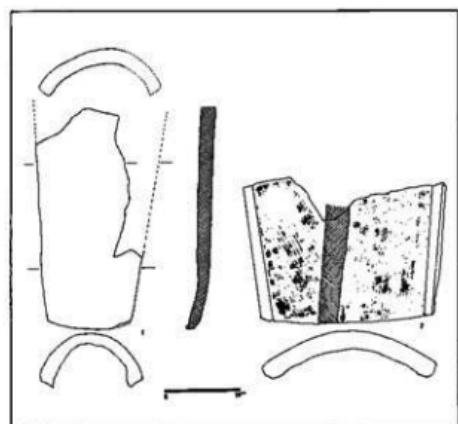
単廊部版築の瓦の上から出土したもので、灰白色軟質で焼成も良くない、小形で高さ7cm杯部の経14cm、脚部は大きく祐を広げるもので、土佐の須恵器V式に編年されるもので、版築上から見出された事からみて、地鎮的要素が考えられる。

鉢（第12図2）

完全な形ではない。金堂の根石の中から見出されたもので、口唇部はやや内傾し、胴部にふくらみをもつ鉢で、底部は丸底になるとみられる。灰黑色硬質で焼成も良好である。奈良時代中葉に編年されるものである。



第10図 平瓦実測図



第11図 平瓦と丸瓦実測図

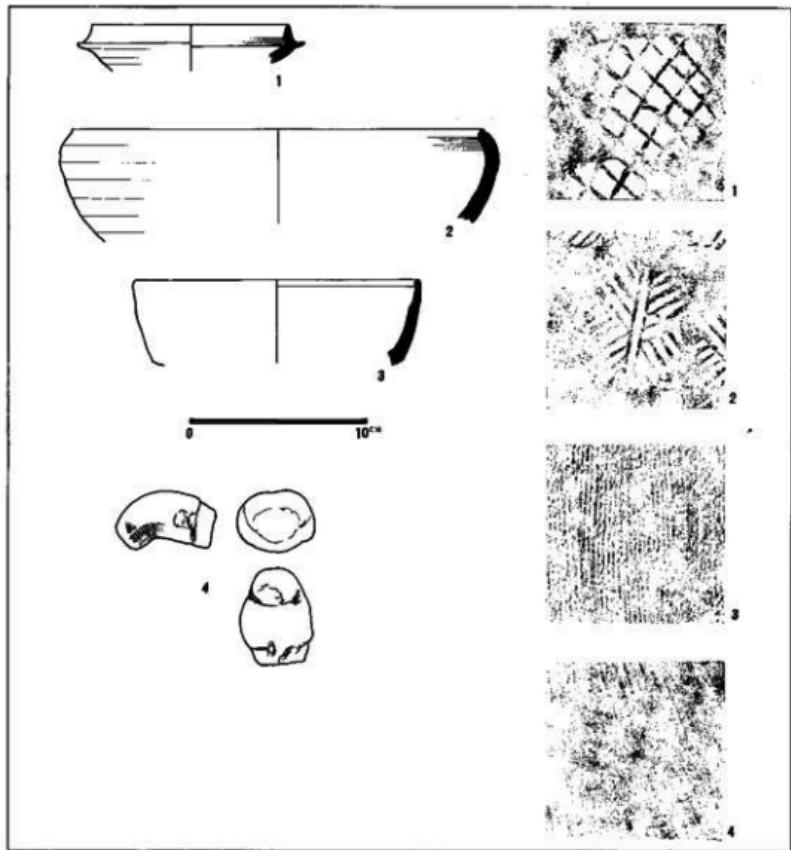


図12図 須恵器、土師器、瓦文様集成

表

完全な形のものではなく、すべて胴部の破片である。出土地点は金堂の根石上部から出土した。表面にタタキ目文、内面にはほりの深い青海波文がみられる。

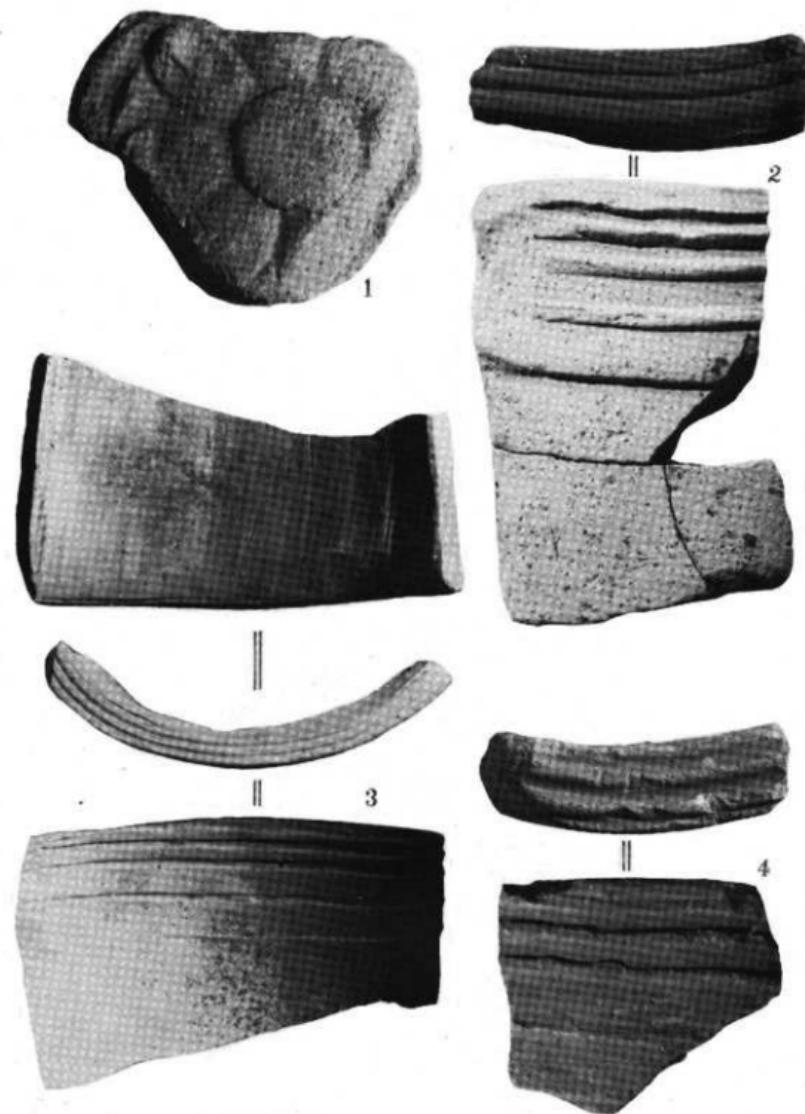
ヘ. 土師器

土師器はすべて小破片である。時期的には8世紀代に編年されるものである。

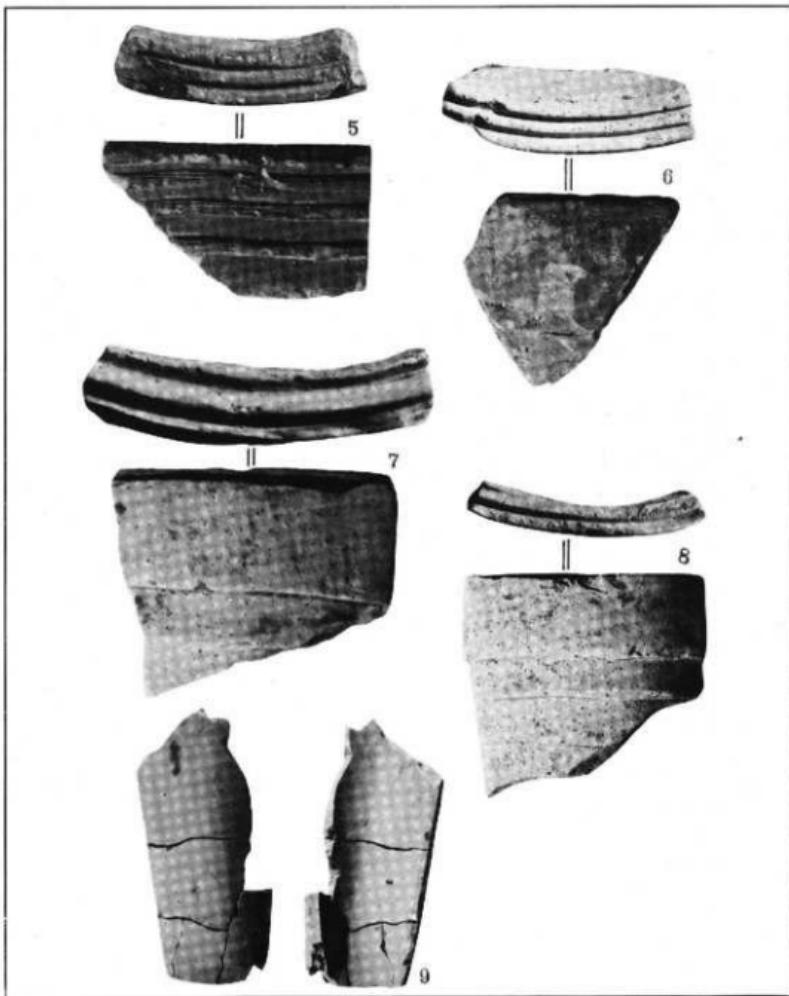
ト. その他の出土品

講堂跡の上部、エノ木の根の間から、寛永通宝1・摺鉢1・カワラケ1・石佛の頭部1が発見された、寛永通宝は別として、中世末から近世初頭の頃のものとみられる。

秦泉寺廃寺跡出土遺物



図版-1



図版-2

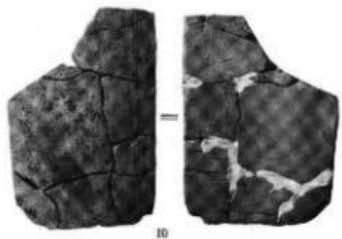
図版 1

1・単弁蓮花文鏡瓦、2・重弧文字瓦その1・3・4は重弧文字瓦その2に分類されるものである。

図版 2

5は重弧文字瓦その2・6・7・8は重弧文字瓦その3に分類される。9は行基弁丸瓦。

図版-3



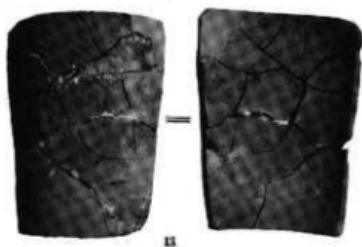
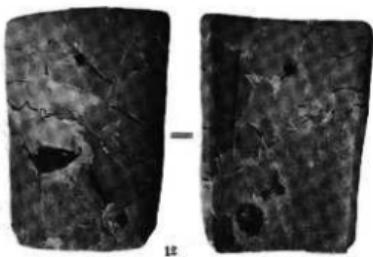
10・11ともに平瓦であるが、降棟に接す瓦で隅切瓦と呼ばれるものである。

図版-4



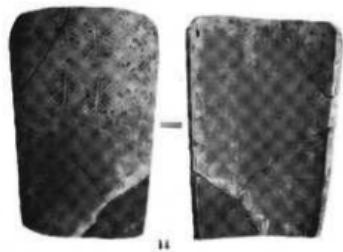
12・13ともに平瓦、12には角釘の穴がみられる

図版-3

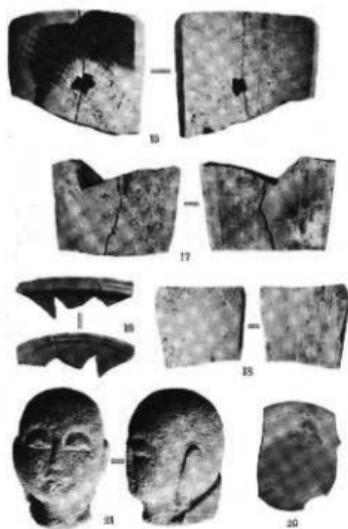


図版-4

図版-5



図版-5



図版-6

共に平瓦で、裏面の文様綾杉文、
焼成は良くなく軟質である。

図版-6

16・18は格子目文のみられる平
瓦、17は繩目文を成形してある。

19・20・21は中世末から近世初頭
の摺鉢・カワラケ・石佛である。

結び

第一次と第二次調査をつうじて、いくつかの解明された問題と今後の調査にまたなければならない点などがある。

第一次・第二次の調査は秦泉寺廃寺跡の寺域を確認するための調査であったが、発堀調査をなす範囲が限定されたことと、日数も短期日であったため、寺域全体を明確にするまでにはいたらなかった。しかし第二次調査をすることによって、第一次調査で判断したことと、ちがった結果を見ることができ、次第に正しい寺域を確認することができつつある。

第一次調査で高知市の所有地原野141-1の南側にみられた版築は、第二次調査により単廊の東側の版築で、その壁面をかためるため多量の瓦を使用して積み上げたものであった。その単廊は原野の基壇南側の雨落溝端から南に14mのび、その先端部に金堂の礎石をのせたとみられる。栗石と割石および須恵器の杯が見出された根石が発見された。遺構の項で述べたように単廊部には7基の根石の位置を確認することができた。

単廊南端に接する根石を中心に、東に2.1m間隔に3基の根石、それに南に向って2.1m間隔に3基の根石が確認された。すなわち根石！（第5図）を中心に東に3間、南に3間の正方形の礎石基定部が明確になった。このことは1の根石を中心西側も同様なことが考えられる。このことは東西6間・南北3間の建造物を推定しうる。そしてこの建物の東側に統いて廻廊と推定される根石が発見され、その間隔は2.1mと1.8mにつくられている。この両面から考えると6間と3間の建造物から東と西の両面に廻廊の一部が見出されたことになる。この中央部の建造物は金堂跡であると推定することが、適當であろう。しかし南北の3間については、その南側が調査されてないので3間と断定することはできない。

なお前述の廻廊は金堂の中央部からのびているのではなく、金堂の北よりの部分からきている。そして金堂中央部の根石1から、廻廊の東端までの長さは13m強である。このことは、廻廊の東西端までの長さが27m近くになる。即ち約80尺の長さと考えられる。

第一次調査で推定した金堂跡については、第二次調査の結果金堂跡ではなく、講堂に考えるのが妥当になってくる。すなわち金堂から講堂までは単廊によって、つながっていたことになる。なお寺域の南北は80尺の4倍の320尺すなわち1町の寺域が南北の長さになろう。

秦泉寺廃寺跡出土の瓦は、奈良時代中期から後期に編年されるもので、そのことは秦泉

寺廟寺の建立年代を奈良時代と考えることができる。奈良時代に建立された寺院であれば、その建築様式は東大寺様式であると考えるべきであろう。

東大寺様式の建築であれば、前述した南北の長さ一町四方を寺域と見るべきであろう。しかし秦泉寺廃寺跡のこの地域内で、塔の心礎があったと断定しうる資料が、いまだ発見されていない。そのことからも寺域を一町四方と考えるよりも、後述する秦泉寺廃寺の性格から考えて、塔をもたない寺院であったとみるべきではなかろうか。そうすれば東西の幅240尺程度に考えてみるべきではなかろうか。

さて当時建立された寺院には、全国に各の国分寺があり、それには僧寺と尼寺がある。しかし国によっては尼寺が建立されなかったと思われる國（県）もある。土佐の場合国分寺は明確であるが、国分尼寺はいまだにはっきりせず、むしろ建立されなかったと言う考えが強い。建立問題はさておき、上佐の国分寺はその寺域が東西500尺・南北450尺となっている。土佐の国分寺の寺域は全国的にみても大きいほうにはいらない。むしろ全国的には寺域としては小さい方である。土佐一国の寺院として建立された国分寺の大きさと、秦泉寺廃寺の寺域とを比較すれば、国分寺の規模がより大きいものであったことは、言うまでもなかろう。それにしても土佐のような僻遠の地で、前述した秦泉寺廃寺の東西1町、南北240尺の寺域をもつ寺院の建立を可能にしたのは、相当の富と権力をもった豪族であったことは言うまでもなかろう。遺跡の環境の項でも述べたが、この豪族こそ土佐の中心である土佐郡を統治した郡衙の郡司ではなかろうか。秦泉寺廃寺が郡衙関係の寺院であると考えれば、その力からみて寺域の規模も前述の大きさがほぼ適當ではなかろうか。なお次期調査をまって、より明確にしていく必要がある。

秦泉寺廃寺発掘調査団

団長 永野益樹

二、山原敏幸、米田穂吉、齊藤澄

副団長 大八木久米一、岡本幹雄

亀知、植田安亮、森常治、三谷千

相談役 川口光子、小谷流水、和田貞玄、

恵、山中伊佐尾、北村稔

山中太郎、横田真澄

事務局 高知市教育委員会、高知県教育委

団員 永野高夫、和田静雄、中島佐、永

員会

野延寿、中山隆美、岩崎正吉、森

事務局長 高知市社会教育課長横井戊辰

本裕、永野拓、岡村久吉、島崎賢

学識経験者 岡本健児、広田典夫

高知市文化財調査報告書
秦泉寺廃寺跡

発行日／1977年3月31日

発行所／高知市教育委員会
高知市丸の内1丁目2-10

印刷所／伸光堂
高知市上町3丁目8-10
TEL (0888)22-3161㈹